シラバス参照(Syllabus)

タイトル「2016年度」、フォルダ「2016年度ー学部ー新潟大学個性化科目ー自由主題」
シラバスの詳細は以下となります。

戻る

科目名(Course Title)	国際開発協力(環境と開発演習)		
担当教員(Instructor)	宮田　春夫		
対象学年(Targeted Student Year)		開講番号(Class Number)	160G3219
講義室(Room)	総合教育研究棟D-308国際センターRoom1	開講学期(Semester)	第1学期
曜日・時限(Day/Period)	木1	単位数(Credit(s))	2
授業形態(Class Type)	講義	資格(Qualifications)	
副専攻(Minor)	副専攻「平和学」		
分野(Academic Field)	75,35	水準(Academic Standard)	05
対象学部等(Designated Faculty)	全学部（主として3-4年生）		
聴講指定等(Designated Students)	開発途上国の開発と環境の問題について強い関心持ち、かつ、既に一定程度の基礎的知識を持っていて、その上で、具体的な事例について自ら調査し、その結果を他の学生と論じたいという学生のための授業です。 副専攻「平和学」指定科目です。課題別副専攻「平和学」登録者以外も歓迎します。但し、定員(5人)を上回る履修希望者のある場合には、副専攻「平和学」修得希望者を優先します。		
科目の概要(Course Outline)	1980年代後半以降、開発途上国の開発を進める上で環境保全は不可欠な要因であるとの共通認識が援助関係者の間にできました。当初は、環境影響評価等を開発プロジェクトに適用して、開発が環境に影響を及ぼすことを防止するための行動が進められ、次第に、専ら環境保全のための援助プロジェクトや開発プロジェクトに環境保全を組み込んだプロジェクトも拡大するようになりました。しかし、それらのいずれもがいまだ完全ではなく、批判や、成功に遠い例もあります。この授業は、そのような事例について、政府、非政府の援助関係者から直接話を聞く機会をも取り入れて、意図通りまたは真にそれを必要としている人に届く援助の難しさという現実を直視した上で、積極的に評価できる面を評価し、そうでない面についてはどのようにしたら改善できるのかを学生が考える機会を提供します。 授業は、履修する学生各自が自ら調査し、それを発表し、それに対して議論を行う形で進めます。		
科目のねらい(Course Objectives)	通常の開講科目やサークル活動、NGO活動、市民活動等で知識を得た学生が、具体的な事例を自ら調べ、それを他の学生と議論して、開発途上国の環境と開発の問題について認識を深める機会とします。		
学習の到達目標(Specific Learning Objectives)	色々な議論の出やすい環境関連のプロジェクト・プログラムの実態から国際開発協力の難しさと意義を理解し、それに基づいて、同じ地球に生きる者として、開発途上国の人々との協力のあり方について、それぞれに認識を持つことを目指します。		
登録のための条件(注意)(Prerequisites)	開発協力に関係する科目を既に履修していることが望まれます。(これまでの関連開講科目の例:開発途上国の環境と開発：事例研究、国際開発協力論:「開発」とは何かI, II、The North and the South over the Environment and Development(旧科目名：応用国際関係論:環境と開発を巡る南北関係)、開発経済学、東南アジア社会論、国際農業論、国際農業論演習等)科目名の変更等もあるので、宮田まで積極的に問い合わせて下さい。		
学習方法・学習上の注意(Study Advice)	適当な研究会、報告会、シンポジウム等があった場合には、受講生とも相談の上、それへの出席を授業の一部とすることも検討します。なお、そのような研究会等への出席に必要な交通費、参加費等は受講生の負担になります。		
授業計画(Lesson Plans)	1.ODAとは何か(0.5コマ) 2.環境とODA: 専ら環境保全のためのODA、環境を取り入れた開発、開発による環境影響の回避(0.5コマ)		

	3.専ら環境保全のためのODAの事例研究 4.環境を取り入れた開発の事例研究 5.開発による環境影響の回避の事例研究(ナルマダダム、コトパンジャンダム等の事例) 6.NGOによる開発協力の事例研究(日本国際ボランティアセンター、シャプラニール、緑のサヘル等の事例) 7.改善についての議論 (各学生は、上記3から6に関する事例研究のうちの1件またはそれ以上を選定して、調査し、報告し、議論し、最終的に小論文にまとめるものとします。)
成績評価の方法と基準(Grading Criteria)	授業における積極性(積極的な質問、発言等)に25点、事例研究における努力に30点、事例研究報告の質に45点を配分することを考えています。但し、それが実情になじまないような場合には、配分割合を変更します。
使用テキスト(Textbook(s))	単一の教科書は使いません。
参考文献(References)	・勝俣誠、1993『アフリカは本当に貧しいのか』朝日選書。新品の入手は難しくなり、中古が1,500円程度から出ています。 ・佐藤寛(編)、1996『援助研究入門:援助現象への学際的アプローチ』348 pp. アジア経済研究所、1,400円。各分野の専門家による表題のとおりの教科書。 ・井村秀文・松岡俊二・下村恭民(編)、2004『環境と開発』200 pp.、日本評論社(重要)。2,800円 ・政府開発援助白書(各年)。印刷版も出ていますが、外務省のODAウェブサイトの「資料・統計」のところからダウンロードできます: http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/index.html ・国際開発学会環境ODA評価研究会、2003: 2002年度特定テーマ評価「環境分野」第三者評価報告書: 環境センター・アプローチ: 途上国における社会的環境管理能力の形成と環境協力: 個別評価研究、110 pp.、国際協力事業団 (非売品。入手については宮田まで。) ・鷲見一夫、1989『ODA: 援助の現実』岩波新書、780円。ODAや先進国からの直接投資によって現地住民の生活や環境が深刻な影響を受けることがあることを論じた、世界的にも先駆的かつ専門性のある著作。 ・佐藤寛、2005『 開発援助の社会学』268 pp. 世界思想社、2,200円。善意の行為がかえって住民にとってマイナスになることがあるなど、開発援助の現場の経験から得られた非常に多くの経験・教訓をまとめた好著。 ・佐藤寛・アジア経済研究所開発スクール(編)、2007『テキスト 社会開発: 貧困削減への新たな道筋』261 pp. 日本評論社、2,200円。各分野の専門家によるかなり詳しい教科書。社会開発のあり方について詳細な知識を得たい時に参照したらよいと思います。 ・佐藤寛「開発援助をめぐる「ドナーの戦略」と「村人の戦略」」、『現代の中東』27 (1999.9): 42-64。援助を受ける村人にも戦略があること、それを理解した上で援助を行うべきことを指摘。(アジア経済研究所学術研究リポジトリから無料ダウンロードが可能:http://ir.ide.go.jp/dspace/) ・佐藤寛(編)、2003『参加型開発の再検討』209 pp. アジア経済研究所、2,500円。「参加型開発」について、各分野の専門家が経験・教訓を論じています。「参加型開発」について具体的な教訓・課題等を得たい時に参照したらよいと思います。 ・大林稔・石田洋子(編著)、2007『アフリカ政策市民白書 2006』118 pp. 晃洋書房、1,400円。日本のNGOがアフリカ各地で行ってきた協力を事例に、アフリカに対する開発協力のあり方について論じている。市民・NGOによる協力を考える際の具体例を提供。 ・草野孝久(編)、2008『村落開発と環境保全:住民の目線で考える』 199 pp. 古今書院、2,800円。バングラデシュ、タンザニア、インドネシア、ケニア、マラウィ、ガラパゴス、サウジアラビア、フィリピン、タイ、カンボジア、ボルネオの具体例を集めたもの。 ・舩田クラーセンさやか(編)『アフリカ学入門』361 pp. 明石書店、2010年。2.500円。「入門」とはあるが、アフリカの開発やそれを取り巻く諸事実を専門研究者が解説したもの。アフリカの開発についてまとめる際に幅広い理解をする上で参考になる。 ・水野正己・佐藤寛(編)、2008『開発と農村:農村開発論再考』 278 pp. アジア経済研究所、3,400円。日本の農村の戦後の生活改善等の事例を多用しつつ、途上国にも当てはまる理論を検討。 ・ジュマ・ネット、2004『バングラデシュ、チッタゴン丘陵で何が起きているか』 62 pp. ジュマ・ネット、500円(購入当時)。バングラデシュ東部の少数民族の事例。 ・栗田英幸、2008『サンロケダム闘争史: なぜ、大規模資源開発は失敗するのか?』 161 pp. 愛媛大学法文学部総合政策学科。非売品(新潟大学図書館に入れました。)フィリピンの事例として。 ・高橋和志・山形辰史(編著)、2010『国際協力ってなんだろう』188 pp. 岩波ジュニア選書、819円。内容は必ずしも「ジュニア」向きでなく、大学生にも好適な包括的入門書。 ・石田洋子、2008『アフリカに見捨てられる日本』236 pp. 創成社、800円。アフリカとの連帯活動に関わっている研究者・実務家による日本とアフリカ開発の関わりの論考と提言。 ・石本雄大『サヘルにおける食料確保—旱魃や虫害への適応および対処行動—』179 pp. 松香堂書店、2012年、2,000円。ブルキナファソ北西部の村の人たちが、干ばつ等にどのように対処しているかをまとめた学位論文を基にしたもの。打ちひしがれているのではなく、いかに多様な対処をしているかがわかります。 ・新井綾香『ラオス 豊かさと「貧しさ」のあいだで—現場で考えた国際協力とNGOの意義』コモンズ、

	182 pp. 2010年、1,700円。日本国際ボランティアセンターの前ラオス・プロジェクトが、その経験から得た様々な教訓をまとめたもの。 ・重田康博、2005『NGOの発展の軌跡: 国際協力NGOの発展とその専門性』347 pp. 明石書店、4,60円。長くNGOに関わった後宇都宮大学教授となった筆者による国際協力NGOの発展の論考。 ・金・福武・多田・山田、2007『国際協力NGOのフロンティア: 次世代の研究と実践のために』301 pp. 明石書店、2,600円。国際協力に関わるNGOの課題についての当事者による論考。 ・日本国際ボランティアセンター(JVC)、2000『NGOの時代 平和 共生 自立』357 pp. めこん、2,200円。日本最大の援助NGOの様々な経験の紹介。 ・国際協力事業団、1988『分野別(環境)援助研究会報告書』49 pp. 非売品。環境のためのODAについての最初の提言。協力の大枠について妥当かつコンパクトにまとめている。 ・同、2010『環境社会配慮ガイドライン』、『環境社会配慮ガイドラインに基づく異議申立手続要綱』「環境」よりも「社会」(コミュニティー)への影響について慎重に配慮し、2人以上の現地住民が異議申し立てをできることを含め、アカウンタビリティー実現のための透明性ある手続き等について規定。JICAウェブサイトから入手可: http://www.jica.go.jp/environment/guideline/index.html ・Bruce E. Johansen, "Indigenous Peoples and Environmental Issues: An Encyclopedia" 507 pp. Greenwood Press, 2003 世界各地の先住民を取り巻く環境問題について、1件につき1-3ページ程度で紹介。 (以上のほかにも、事例研究のための文献等の参照が必要です。事例によっては外国語になります。価格は私の購入時の本体価格です。)
関連リンク1(Link 1)	国際協力機構(JICA)のウェブサイト(ODA基礎情報、個別プロジェクト情報、環境社会配慮等々)
関連リンク2(Link 2)	外務省: ODAのページ
関連リンク3(Link 3)	OECD開発援助委員会(DAC)
関連リンク4(Link 4)	国際協力NGOセンター(JANIC)(日本の援助NGOの協議組織)
備考(Remarks)	副専攻「平和学」指定科目です。2012年度まで副専攻「平和学」のためのQコード科目でしたが、2013年度からGコード科目に変更して、より多くの学生が履修しやすいようにしました。このコード変更に際して、科目名を「国際開発協力演習(環境と開発)」から少し変更しました。 事前照会歓迎。質問等があれば、宮田までe-mail等で連絡下さい。 文系科目です。

戻る

Copyright (c) 2006 NTT DATA KYUSHU CORPORATION. All Rights Reserved.